

<研究ノート>

夏目漱石と社会学

潮 見 実

1. 序 論

「文学の中の経済学と社会学」(昭和40年11月千倉書房)と題する書物において、著者榎崎敏雄経済学博士は、漱石についてつぎのような短評を加えている。

彼は、漱石が「第一次大戦後の見透しについて物語っている」とする「真影録」をとりあげて、それがロシアの共産革命の一年前の大正5年1月に書かれたものであること、そしてそのなかの言葉が革命後の実情と反する点を指摘して、漱石の思想は「甘い」、「さすがの文学の巨匠も、社会思想や経済思想については、多く読書し、または思索するということもなく、従ってそれらの点についての洞察や予想は、全くかれの能力を越えたものであったといえよう」と結論を下しているのである。

ところで、榎崎博士もとりあげているのであるが、その「真影録」中の言葉を原文のままつぎに引用してみよう。

どんな影響が出て来るか、来て見なければ無論解らないが、吾々が是はと驚くような目覚しい結果は予期しにくい。元来事の起りが宗教にも道義にも乃至は一般人類に共通な深い根底を有した思想なり欲求なりに動かされたものでない以上、何方が勝ったところで、善が栄えるという訳でもなし、又何方が負けたにしろところで、真が勢を失うという事にもならず、美が輝きを減ずるといふ羽目に陥る危険はない。……実際此戦争から人間の信仰に革命を引き起すやうな結果が出て来ようとは思はれない。又従来の倫理観念を一変するような段落が生じようと考へられない。これが為に美感の標準に狂ひ

が出ようとは、猶更懸念ができない。何の方向から見ても、吾々の精神生活が急激な変化を受けて、所謂文明なるものの本流に強い角度の方向転換が行はれる虞はないのである。

以上の「真影録」の言葉から推論する限り、漱石の社会思想についての甘さの一面を指摘することも、あながち的をはずれたものとはいいい難いように思われる。

私が、ここで、榎崎博士の漱石観を問題にしたのは、わが国の社会学者としては珍らしい、このような、文学と社会科学とのからみ合いを探ろうとする試みの一例として示そうとする意図からなると、同時に、今後、文学を愛好するわが国の社会学者の多くが、つぎつぎとこの種の試みを敢て企てることを大いに期待するからなのである。

つぎに、以上をまえ書として、これから私の漱石観の一端を述べることにしよう。

さて、漱石の作品、講演、談話などを社会学的に考察してみたいとは、かねてから思っていた私のひそかな課題なのであるが、いまだにその機会が十分に得られないのはまことに残念である。

ところで、彼の作品などを社会学的に考察するといっても、やや漠然たる感をまぬがれない。社会学的とはいっても、考察の対象あるいは観点を異にするにともなう、いろいろの解釈が生れるであろう。例えば榎崎博士の場合にしてからが、「文学の中の社会学」とはいうものの、漱石に関する限り、僅かに社会思想の一端に触れただけに過ぎないからである。

私は、この小論をいとぐちとして、今後彼の人間観、社会観あるいは文化観が、彼の作品や講演や談話などにどのように表現されているかを、社会学と対応させつつ分析するという作業に限定し

てみたいと思っている。

たとえば、彼の作品「抗夫」のごときは、彼自身の言葉を借用すると、「好い加減に作った想像のものである」¹⁾ というのであるが、私は、当時の鉱山労働者の生活の一側面を、ある意味では、より一層生々とその実態を描きだしたものとして、出色の作品の一つであると高く評価しているものである。ここで私はまた「ある意味では」などという漠然たる言葉を不用意に使ってしまったが、それは、今日の実証主義を重んずる、否とくに重証主義を過度に重んずる社会学者なら、おそらく一顧するだに値しないとするであろうようなこの作品のなかに、私としては、一層生々とした抗夫の生活実態の一断面を感じとることができるから、という意味なのである。

詳しいことは別の機会にゆずるとして、もう一つ例をあげてみよう。

それは「吾輩は猫である」のなかの一場面であるが、月並の定義を質問する苦沙彌の妻君に向けて、迷亭が彼一流の説明を弄するくだりがある。やや長文となる嫌いがあるが、とにかく面白いので原文のまま引用することにしよう。

「一体、^{つきなみ}月並々と皆さんが、よく仰やいますが、どんなのが月並なんです」と開き直って月並の定義を質問する、「月並ですか、月並と云うと——左様ちと説明し悪くいのですが……」

「そんな曖昧なものなら月並だって好きさうなものぢありませんか」と細君は女人一流の論理法で詰め寄せる。曖昧ぢありませんよ、ちゃんと分って居ます、只説明し悪い丈の事ですか」「何でも自分の嫌いな事を月並と云ふんでせう」と細君は我知らず穿った事を云う。迷亭もかうなると何とか月並の処置を付けなければならぬ仕儀となる。「奥さん、月並と云ふのはね、先ず年は二八か二九からぬと言はず語らず物思ひの間に寝転んで居て、此日や天気晴朗とくると必ず一瓢を携へて墨堤に遊ぶ連中を云ふんです」「そんな連中があるでせうか」と細君は分らんものだから好加減な挨拶をする。「何だかごたごたして私には分りませんは」と遂に我を折る。「それぢゃ馬琴の胴へメジョオ、ペンデニス*の首をつけて一二年歐洲の空気で包

んで置くんですわ」「さうすると月並が出来るでせうか」迷亭は返事をしないで笑って居る。

「何そんな手数のかかる事をしないで出来ます。中学校の生徒に白木屋の番頭を加えて二で割ると立派な月並が出来上ります」「さうでせうか」と細君は首を捻った儘納得し兼ねたという風情に見える。

* メジョオ、ペンデニス Major Pendennis. 明治43年6月6日附橋田東声宛書簡に「メジョー・ペンデニス。(サッカーの小説ペンデニス中に出て来る人物。世俗的知識に富めど高尚な理想も何もない所謂世間的の人、或は俗物)」とある。(昭和40年12月発行、岩波書店、漱石全集第一巻「吾輩は猫である」p. 574 注解より引用、因に同頁に「年は二八か二九からぬ」「言はず語らず物思ひ」「此日や天気晴朗」「一瓢を携へて墨堤に遊ぶ」及び「馬琴」に関する注解があるが、いずれもマンネリズムに堕した表現にかかわるものとして説明してあるが、詳細なことはこの場合省略する。ただメジョオ・ペンデニスに関するものだけ原文のまま第一巻末尾の「注解」から引用したのである……潮見註)

ところで、以上の引用文のなかで「“そんな曖昧なものなら月並だって好きさうなものぢありませんか”と細君は女人一流の論理法で詰め寄せる」という文句があるが、これなども漱石の女性観の一端を示すものとして興味深いが、さらに私が関心を覚えるのは、彼がその当時の社会大衆の画一的、規画的な心情・意識を現わすために用いた“年は二八か二九からぬ”から始まって“一瓢を携へて墨堤に遊ぶ”で終わっている文句である。今日の社会学者、とくに大衆社会状況やマス・コミを専攻している社会学者なら、現代流行の言葉を使って、さらにたくみに表現することであろう。ことに彼が迷亭をして最後に「中学校の生徒に白木屋の番頭を加えて二で割ると立派な月並が出来上ります」と云わしめている文句であるが、これを敢て現代風に翻訳して「高等学校・大学の生徒・学生にサラリーマンを加え、さらに平凡パンチ級の週間誌を足して三で割ったら今日の月並ができ上ると換えてみたらどうであろうか。これで直ちに立派な典型的な今日の月並ができあがるとも思われないが、さりとて、当らずといっても余り遠からずといったところではなからうか。もちろん今日の社会学者はもっと器用に、しかもいわゆる科学的に表現するに違いない。

要するに、この「吾輩は猫である」から始まっ

て「明暗」にいたる迄の数々の作品、それに講演や談話などに表現されている彼の人間観、社会観、文化観などと、今日われわれが社会学でとりあげているもろもろのテーマとをかみ合わせてみたら、さぞ興味あるものが得られるであろうというのが、さきにも述べたように、私のかねてからの、しかもいまだに一向果たせそうにもない私のひそかなる課題なのである。

ところで、この作業は相当の日時を要しかつ中々容易なことではないので、差し当りここでは単に、漱石が社会学に対してどのような見解を抱いていたであろうかを、極めて断片的ながら、その一端に触れてみたいと思う。

2. 漱石と社会学

とくに Ward Dynamic Sociology との関係について

さて漱石全集第16巻、岩波書店、1967年所収の「蔵書の余白に記入されたる短評並に雑感」によると、文学に関する専門書はさておいて、哲学、心理学及び社会科学に関する外国文献も相当多方面にわたって集められており、しかもなかには相当丹念に目を通したと思われるものがあることが、その記入された短評や雑感でうかがわれて甚だ興味深い。

とくに社会科学、倫理学、心理学、社会心理学などに関する文献だけを若干ひろってみるとつぎのようなものが挙げられる。

J. M. Baldwin: Social and Ethical Interpretation in Mental Development

H. Sidgwick: The Methods of Ethics

G. Le Bon: The Psychology of Socialism

L. F. Ward: Dynamic Sociology, Vol. I., 1904, Vol. II., 1907

F. H. Giddings: The Elements of Sociology

Ch. Letourneau: Property: Its Origin and Development

Ch. Letourneau: The Evolution of Marriage and of the Family

M. Guyau: L'Art au Point de Vue Sociologique

H. R. Marshall: Pain, pleasure, and Aesthetics

K. Gross: The Play of Man

ところで Ward の Dynamic Sociology であるが、漱石はこの部厚い書物を辛棒じて読みとおしたとみえ、つぎのような短評と雑感を余白に記入している。

Vol. I に対し

[見返しに]

○斯様に門構の広く玄関の立派な本は滅多になし。

○著者自身の広告に釣られて段[々]奥の方へ這入って見ると、奥行は存外浅いものである。

○前置はえらいが、いざと云ふ場合になると大抵は中途半端で已めて仕舞ふ。何処といって肝心な処に徹底した処は少しもない。売薬の広告と同じく飲んでちっとも効目がなく見て大変えらさうである。

○よくこんなに材料をならべたと思ふ。さうしてよく是丈の事を何遍々々も重複して平気でゐられると思ふ。普通の人が是丈の事を云ふなら少くとも此十分一の紙数で沢山である。又普通の学者が書けば此うちの一章を一章の書物として出版するに極つてゐる。其点から見て此著者は常識を失してゐる。

○ダイナミックと云ふ名にだまされて、とうとう仕舞迄読んだのは残念である。

○然し長い道中のうちに退屈ながら色々の事物を見たり聞いたりしたのは幸である。只巡礼の参詣すべき御堂が何処にも見当らないのを遺憾とする。

四十三^原月十一月十七日夜

○此処 gap アルニ似タリ。過渡円滑ならず。(p. 389)

○Yes! (p. 573. 11. 27-7, p. 578. 11. 12-34)

Vol. II に対しては

○此人の“happiness”頗る曖昧也、滔々数千言遂に空論に終らずんば幸也 (p. 174. 1. 12)

○? (p. 487. 1. 4: “amply sufficient.” 1. 18: “far below”)

以上が Ward の Dynamic Sociology, 2 vols. に対する漱石の短評並に雑感のすべてである。

とにかく、アメリカ社会学の先駆者の一人であり、アメリカ社会学会の初代会長でもあった

Ward も、漱石の毒舌?にかかっては全くかたなしと云わざるを得ない。

ちなみに、Ward はコントやスペンサーと同様に、進化論の立場から、典型的な総合社会学を構想し、その著書としては漱石の読んだ *Dynamic Sociology*, 2 vols, 1883 のほか、*Pure Sociology: a treatise on the origin and spontaneous development of society*, 1903 及び *Applied Sociology: a treatise on the conscious improvement of society by society*, 1906 などが著名である。

したがって、Ward の著書は単に社会学者ばかりでなく、わが国でも当時広く知識階層の間で読まれたもののようである。たとえば大杉栄のごときはその“イグノランド”²⁾と題する小論のなかで、山田檳榔の、大杉の「征服の事実」に対する批判即ち「全体この論者(大杉)は……個人我と社会我のレラティブ・ミイニングおよび個人団体国家等の累関的意義についていかなる概念の取扱い方をなしつつあるかが疑わしい。少なくとも最近のゾチオロギッシュな、ポジティブフィッシュティッシュな、思想の発達にウェグルンドなしに、現時の社会問題および近代思想問題の考察をなすのでは不十分だ」という批判に反論して、大杉は、「僕の“征服の事実”のほとんど全部が、Ward 著 *Pure Sociology* の一節をねじこねたものであることも御存じないで、最近のゾチオロギッシュな、ポジティブフィッシュティッシュなもへちまもあったものですかい」とやりかえしているところからもみても、Ward の著書は当時各方面に相当の影響を及ぼしたもののようであるといつて差し支えないようである。ただしこの論争の一つのポイントである「ポジティブフィッシュティッシュ」の意味を山田と大杉がどのように理解していたかはここでは問わないこととする。とにかく漱石の酷評とは反対に大杉が Ward から少からざる影響をこうむったことだけは確かなようである。

ところが漱石の場合にあつては、とりあげた書物は、大杉の場合と異なるけれども、「ただ僅かに長い道中のうちに退屈ながら色々の事物を見たり聞いたりしたのは幸である」とか、あるいは「Yes!」とかいって多少興味を覚えたり同感したりしたと思われる個所が部分的にはあるけれども、つまるところは「斯様に門構の広く玄関の立派な本は滅

多になし」から始まって、遂には「ダイナミックという名にだまされて、とうとう仕舞まで読んだのは残念である」とまで酷評しているところから察すると、全体的あるいは結論的には Ward に対して好意的であつたとは思われない。

なお、さきに挙げた文献のなかの F. H. Giddings の *The Elements of Sociology*, 1897 に対しても

○Syencer G. Allen ト同説 (p. 39. 11. 24-5)

○是ハ智仁勇兼備ト云フ意(?) (p. 113. 11. 31-5)

とあるだけで漱石が Giddings に対してどのような感想を抱いたかは、この二つの短評だけからでは何とも推測のしようがないけれども、とにかく Ward の *Dynamic Sociology* を読んだ限りでは、彼は大いに失望を感じたもののようであると断言してもよさそうである。

「ダイナミックと云ふ名にだまされて、とうとう仕舞迄読んだのは残念である」とか「只巡礼の参詣すべき御堂が何処にも見当らないのを遺憾とする」などの短評のうちに彼の失望の程が端的に表現されているのであるが、彼が探しもとめて遂に見当らなかつたとする「御堂」が果たしてどのようなものであつたのか、それは恐らく彼がだまされたと称する「ダイナミック」の意味、一体どこがダイナミックなのかということであつたことには間違いないようである。

ところで Ward の側からすれば、漱石に理解されようがされまいが、それとはかかわりなく Ward 自身は一体何をいおうとしたのであるか、その「ダイナミック」の意味を彼の立場にたつてここで説明すべきであるかも知れないが、この詳細な検討は本論の主旨ではないのでここでは割愛することとする³⁾。

以上のようにみてくると漱石といわゆる「社会学」とは、結局のところ極めて縁遠いようにみえるのであるが、にもかかわらず、なぜ敢て彼を社会学の前に引張りだしてきたのかというと、それは彼の講演の一つの「無題」と題するものの論旨の一部が、面白いことには Ward の *Pure Sociology* のなかの一節と、ある程度関連があると思われるからなのである。

この講演とは、大正3年(1914年、したがって

Pure Sociology の初版のでた 1903 年から既に 11 年経過している) 1 月 17 日東京高等工業学校で行ったもので、そのなかで彼はつぎのように述べている。

私はかつて或所で頼まれて講演した時、日本現代の開化という題で話した。その講演のとき開化の definition を定めた。開化とは人間の energy の発現の径路で、この活力が二つの異った方向に延びて行って、入り乱れて出来たので、その一つは活力節約の行動といって energy を節約せんとする吾人の努力、他の一つは活力を消耗せんとする趣向、即ち consumption of energy である。此二つが開化を構成する大なる factors で、これ以外には何もない。故に此二つのものは開化の factors として sufficient and necessary である。

それで第一の活力を節約せんとする努力は種々の方向へ出るが、先づ距離をつめる、時間を節約する、手でやれば一時間かかる事も、機械で三十分でやってしまふ。或は手でやれば一時間かかって一つ出来る所を、十も二十もつくる。さうして吾々の生活の便を計るのです。之があなた方の専門のものである。他の factor 即ち consumption of energy の努力は積極的のもので、或種の人達からは国力等の立場より見做して消極的なものと誤解されて居る、文学、美術、音楽、演劇等は此方面に属す。是等のものはなくてもすむものであるが、しかもありがたいものです。是等は、幾分か片方で切りつめて余った energy を此方の方に向ける、どちらかと云へば押しのふとい方なのである。

……(中略)……

二つのものの性質を概括して云ふと、あなたの方の方は規律で行き、私共の方は不規律で行く。その代り報酬は極悪い。金持になる人、なりたいた人は、規律に服従せねばならない。あなたの方の方は mechanical science の応用で、私共の方は mental なのだから割がいい様だが、実は大変に損をしているのです。然しあなた方は自由が少ないが、私共は自由と云ふものがなければ出来ない仕事であります。猶云ひかへれば、あなた方は仕事に服従して我と云ふものをなくな

さなければ出来ないのです。各自個々勝手な方面へ行ったなら、仕事はできない。私共の方は我を発揮しなければ、何も出来ません⁴⁾。

以上が漱石の講演の一部であり、ところどころやや納得しがたい点がないではないが——たとえば“金持になる人、なりたいた人は、規律に服従せねばならない”などという見解は“規律”の解釈しだいで肯定的にも否定的にもうけとられる嫌がある——この講演の主旨を簡単に要約してみるとつぎのようになると思う。

開化の十分で必要な二つの要素は

- (1) エネルギー節約の行動：生活の便を目的とする科学、技術などのいわゆる物質的、機械的な文化：規律を重んずるがための不自由：没我
- (2) エネルギー消耗の行動：なくともすむがしかもありがたいものとしての文学、美術、音楽、演劇などのいわゆる精神的な文化：自由を重んずるがための不規律：我の發揮

* 「開化」(註 5)という言葉は、直ちに明治時代の初期に流行した「文明開化」の開化を思い出させるが、この文明開化は“未開野蛮な状態”から“欧米流の合理主義、機械文明”への移行を謳歌するような意味で当時使用されたもののようである。しかし漱石は開化という古い言葉を、むしろ今日いう物質文化、機械文化、精神文化などを含んだ広義の文化の同義語としてつかっているように思われる。

なお文明開化については、加田哲二著“現代日本文明史、11、社会史”(昭和 15 年)のなかで、加田が加藤祐一の“文明開化”(明治 6、7 年刊)からつぎのような面白い一文を引用しているの、それを紹介しておこうと思うが、この加藤の場合はとくに欧米流の合理主義に重点をおいた説と解してよいようである。

加藤祐一“文明開化”より引用。

「……よく世間の人のいふことを聞くに、豚を喰ふたと云ふては文明じゃ、あいつは此頃蝙蝠傘さして歩行をえらい文明じゃ、沓(クツ)はいたままで座敷へ上りをったこりゃちと迷惑な文明じゃ、おまけにつれて来た犬も上りをった、御札で鼻かみをとった、仏壇を毀ちをとった、えらい文明じゃと西洋人の真似するか、耳に新しい事、目に新しい事、人に異った事さへすればなんでもかでも文明開化にしてしまふが、さういうものでもない。元来の趣意を知らいでめったむしように、耳目に新しい事するばかりを、文明開化じゃとおもうては、とんだ間違ひが出来。文明と云ふのは、文字でも考へて見るがよい、文にあきらかと云ふことで広く学んで世界中のことを知りあきらめ、其のよい所を取って我身の心得又行ひとするを真の文明とも云ふべき事でム(ゴ

ザ)る。……今日開化文明の世と成て、婆ア談議を聞いている時ではない。元来万物の靈なる人が如何にもせよ、我が心に分別のつかぬと云ふ事はない事で、不思議な事合点のゆかぬと思ふ事は、夫なり、不思議にしてしまはずに、如何な理由であらうと今一つ折入って考へて見るがよろしい」

漱石はもちろん精神文化にたずさわるものとして、彼のいわゆるエネルギー消耗の行動の意義を自由だとか私の發揮とかいう点で大いに強調しているようであるが、彼とは遠縁であるとさきに述べた Ward にも、尤も彼の場合とは対蹠的に、エネルギー節約の行動を強調しているような所見がみられるので、つぎにその一部を紹介することにしよう。

“節約の法則”(the law of Parsimony)は心理的及び社会的現象のうちに極めて広く一般化されている。この法則は社会の諸構造力の成果、即ち快楽と苦痛との代数的総計の結果なのであるから、最小努力で最大獲得(greatest gain for least effort)ということは、最小苦痛で最大快楽(greatest pleasure for least pain)ということになる。快楽も苦痛もともに動因であり、生理学的にはともに積極的であるけれども、社会学的には、快楽は積極的であり、苦痛は消極的であるといつて差し支えない。もし積極的な方の条件が消極的な方の条件にまさるならば、その結果としての行為は積極的即ち追求(pursuit)の性質のものとなり、もし消極的な方の条件が積極的な方の条件にまさるならば、その結果としての行為は消極的即ち退行(retreat)の性質のものとなるであろう。Thon もアメリカ社会学雑誌第2巻、1897, pp. 735-736 で、心理学や自然科学において、いろいろな具合につかわれている「最小努力の法則」(the law of minimum effort)は、社会学においても有用な法則となるであろうといっている。

しかしながら、この節約の法則は必ずしも進歩にだけ味方するように機能するとは限らない。それはしばしば退化の原因ともなる。たとえば最も真しな有効な労働を阻止するという傾向がそれである。そこでスペンサーはつぎのように述べている。

「殆んどの人間は、安易なあるいは僅少な努

力で、心地よい昂奮をとまなうような種類の精神的な仕事に心が惹かれがちである。したがって、歴史とか伝記とか小説とか詩歌などの類は、この点で科学よりも大衆(majority)にとっては一層魅力がある。ガイダンス(guidance)に役立つような事物一般の秩序に関する知識などよりも一層魅力的なのである(“Principles of Ethics,” Vol. I, New York, 1892, p. 519)」と。

節約の法則の真の基盤は効用(utility)である。したがって、換言すれば、これまた一つの社会学的法則でもあるところの限界効用の法則と殆んど同じものである。けれども、効用そのものは究極的には、満足、幸福、快楽に還元することができるので、したがって、われわれは再び心理学的基盤の上に下り立つことになる。このような問題に対して、卒直な、しかも見事な追究を示したコンドルセ(Condorcet)はつぎのようにいっている。

「人間というものは常に、彼に最大の幸福を約束するような行為をなそうとするものである。彼は眼前の快楽のために魅せられようと、あるいは将来の利益のためにその眼前の快楽を拒否しようとも：快楽、貪慾、野心によってひきずり廻わされようと、あるいは栄光への愛、人類愛、もしくは個人への親切、良心の呵責への恐怖、正義のルールや道徳の実践に忠実に従うことの内面的満足をしみじみと味わいたいとの慾求のために、それらの快楽、貪慾、野心を犠牲にしようとも：下等な享楽あるいは極めて高貴な純粋な快楽にもとづく利害の計算によって、来世の報酬と処罰の観念によって、もしくは神(Supreme Being)の意志に従おうとの宗教的熱狂によって、善へ傾倒しようとも：彼は常により多くの快楽かもしくはより少ない苦痛をそこから期待し得るような行為を遂行するものなのである(“Tableau Historique des Progrès de l'Esprit Humain,” Paris, 1900, pp. 357-358)」と⁶⁾。

なお Ward はさらに the law of greatest gain とか、the law of minimum effort とか、面白いことには Ratzenhofer の“労働嫌忌の法則”(Gesetz

der Arbeitscheu) とか, Vebren の有閑階級論なども援用して, 彼自身の節約の法則 (the law of Parsimony) の妥当性を立証しようところみているのであるが, やや煩雑となる嫌いがあるので別の機会にゆずることとして, ここでは省略することにしよう。

要するに, Ward の見解は, すべての行動の動機および目的は greatest pleasure for least pain という心理学的発想にもとづくヘドニズム(hedonism) の影響をかなりうけているもののようである。というのはヘドニズムの後継者の一人と目されている Spencer を初めとして, とくに Condorcet の説を援用しているところからみても, 確かに Ward の説は快楽説の影響をうけているものと理解しても差し支えないように思う。

もっとも, この快楽説は, すべての行為の動機づけを快, 不快の感情と関連させようとするものであるが, この両者の間にはなんらかの重要な関係があるとしても, いまだ決定的断定をくだし得る段階にはいたっていないというのが今日の通説となっていることを, 念のためにこの際ことわっておかなければならない。

それはさておいて, Ward の“節約の法則”は, さきにも述べたように, ヘドニズムないしは“最小努力で最大獲得”という発想にもとづいているのであるから, 漱石のいわゆる“energy を節約せんとする吾人の努力”という行動にかかわるものといって差し支えないであろう。

ところでここで問題としたいのは, Ward がその主張を立証しようとして援用したとさきにも指摘しておいたところのスペンサーの見解である。

スペンサーは, 社会の進化を強制的協同の支配する軍事型社会から, 自発的(spontaneous) 協同が行われる産業型社会へ移行するとの見解を述べているのであるが, この産業型社会の発展のためには, スペンサーのことばを借用すれば, 「ガイダンス(guidance)⁷⁾に役立つような事物一般の秩序に関する知識」即ち科学, 技術を重視しているもののように思われる。

ところがスペンサーによると, 大衆(majority)にとっては, このような科学, 技術よりも「安易なあるいは僅少な努力で心地よい昂奮をとまうような, 歴史とか伝記とか小説とか詩歌の方に,

より一層の魅力を感じる」というのである。漱石が折角, “規律を重んずる”人達と異って金持になれなくとも, そのかわりに大いに“自由”を享受し, “我”を発揮しつつあるなどと, 高等工業学校の生徒らの前で得意になって辨じたものの, スペンサーをして云わせれば, 漱石文学のような“energy を消耗する”mental な努力も, energy を節約しようという大衆にとっては, 安易な努力で心地よい昂奮がえられるという意味で魅力的であるという“消極的”(Ward のことば) な結果になるのである。

以上のような, 漱石と Spencer らの科学, 技術文化と精神文化の捉え方や社会への影響力の評価については, もっと精細な分析を要することは云うまでもないのであるが, ともかく, この Ward や Spencer らの見解に対し, 漱石が yes! といって同感するか, それとも no! といって拒否するか, 彼が生きていたならたずねてみたいものの一つである。そしてまた, このように考えると, Dynamic Sociology ばかりでなく, ついでに Pure Sociology や Spencer のものをも是非漱石に読んでもらいたかったと思われるのである。

わたくしはとてもこの Pure Sociology を通読する根気をもっていないが, 彼ならひょっとすると「Pure ということばにだまされて」仕舞まで読んだかも知れない。けれども, 本書に対してもまた「……然し長い道中のうちに退屈ながら色々の事物を見たり聞いたりしたのは幸である, 只巡礼の参詣すべき御堂が何処にも見当たらないのを遺憾とする」などと文学的表現で酷評するかどうか, これまた, たずねてみたい事柄の一つである。

ちなみに, Pure Sociology も3部, 20章, 607頁の力作である。そして Ward 自身の「広告」(漱石の用語)に相当する本書の preface において, 彼は applied Sociology の中に包含しきれぬようなあらゆる事柄をとり扱うのが Pure Sociology であって, そのために The Origin and Spontaneous Development of Society という副題を用いた, なお spontaneous (Spencer もこのことばを用いていることはさきにも指摘しておいたが) なものはすべて pure である, などと述べているのであるが, 果たして漱石がこのような見解を是

認するかどうか、これまた問題の一つである。

3. む す び

夏目漱石の人間観，社会観，文化観などと社会学者らのそれとをかみ合わせてみたら，一寸面白かろうと，かねてから思っていたので，その手初めとしてこんな小論をものしたのである。

それに私も青少年時代に漱石文学の影響を尠からずこうむったものの一人であるので，今回喜寿を迎えられた小寺教授にとっても漱石は想い出の深い作家の一人であろうと勝手に推測して，このような試論を取て小寺教授に捧げる次第である。

註 1) 前出「漱石全集」第16巻所収「抗夫」の作意と自然派伝奇派の交渉”参照のこと。

2) 現代思潮社「大杉栄全集」第2巻，p. 48～49

- 3) Ward は Comte と同じく社会静学(social statics)と社会動学 (social dynamics) とを区別し，前者で社会の構造とその均衡とをとり扱い，後者で社会過程 (social processes) をとりあげている。
- 4) 漱石全集，第16巻，岩波書店，1967年，所収。
- 5) 文明とか開化とか文化という文字は明治から大正にかけてさかんに用いられたが，われわれは，これらを今日では文化という概念で一括している。さて，この文化の意義についてはまことに多義にわたり，明治から大正にかけてのその意味を類型化すると7つから8つ位に分けられるように思う。このことについては別の機会にゆずりたい。
- 6) Pure sociology, “The Law of Parsimony”, p. 161～163. この law の適訳は別にあるのかも知れないが，筆者は寡聞にしてそれを知らないので，漱石の“節約”と対応させるために“節約の法則”と訳しておいた。
- 7) guidance の適訳が見つからぬので原語のままにしておくけれども，今日われわれがよく使用する orientation 方向づけ，方向性と同意のものと解釈したらどうであろうか，今後の検討をまちたいと思っている。